帰国子女の文化的アイデンティティとその葛藤

慶應義塾大学法学部政治学科4年I組
塩原良和研究会10期
31658738
冨永　菜々子

目次

序章
１．問題意識と目的・研究の問い
２．先行研究と本論文の位置付け
３．本論文の構成

第１章　文化的アイデンティティについて
1-1. アイデンティティとは
1-2. 文化的アイデンティティの定義
1-3. 「文化」とは
1-4. 文化的アイデンティティの形成時期とプロセス
1-5. 文化的アイデンティティの構成要素
1-6. 文化的アイデンティティと自信・自尊心の関係性

第２章　帰国子女について
2-1. 帰国子女の定義
2-2. 帰国子女の文化的アイデンティティの特徴
2-3. 帰国子女に対する国外サポートや国内受け入れ体制 ー現状と問題点ー

第3章　異文化間移動における適応ストラテジー
3-1. 先行研究で提示されている適応ストラテジー・モデル
3-2. 四つのストラテジーの解説

第4章　インタビュー調査
4-1. インタビューの目的
4-2. インタビューの方法
4-3. インタビュー結果の活用方法
4-4. インタビュー結果
4-4-1. インタビュー１
4-4-2. インタビュー２
4-4-3. インタビュー３
4-4-4. インタビュー４
4-5. インタビューの分析
4-6. インタビュー全体を踏まえての考察

第5章　おわりに

引用文献・参考文献

序章

１．問題意識と目的・研究の問い

私は幼少期の8年間を日本国外で過ごした帰国子女の一人として、帰国子女の文化的アイデンティティの特徴というものに興味を持った。そのユニークな特徴を作り上げる要因として、アイデンティティ形成が活発な学齢期に異文化間移動を通して、複数の全く異なる文化に触れる経験が真っ先に挙げられる。

また、帰国後のアイデンティティの変容も帰国子女の文化的アイデンティティの特徴の一つであると言われている[1]。母国に帰国後、長年外部環境と相互作用しながら形成されていった文化的アイデンティティが変容するケースもある。私自身も、帰国した直後はアメリカに対する帰属意識の方が強かったが、日本で生活をすると共に、無意識のうちに日本に対して帰属意識を持つようになった。

そうした帰属意識の変化を象徴する個人的な経験として、アメリカに「帰る」と「行く」という二つの言い方の例が挙げられる。帰国直後は、アメリカに旅行する際に、アメリカに「帰る」という感覚を持っていた。しかし、帰国後しばらくした時、ふと無意識に出た言葉が、アメリカに「帰る」ではなく、「行く」だった。こうした「帰る」「行く」などの言葉のチョイスから文化的アイデンティティの変容が確認できる。

このような現象は、カルチュラル・スタディーズの代表的学者であるスチュアート・ホール(Stuart Hall)の文化的アイデンティティに関する理論により説明される。ホールは、人は自身の過去の経験と現在の経験を結び付けて話す位置を決定すると考え、個人の文化的アイデンティティはその語りの中に現れると主張している[2]。このようなユニークな文化的アイデンティティを持つ帰国子女は、一国で生まれ育った人に比べ、文化的アイデンティティに由来する葛藤や問題に直面する場面も必然的に多くなると言える。

今後、日本における帰国子女の数が増加することを踏まえると、帰国子女の文化的アイデンティティの複雑性や、複雑であるが故に引き起こされる葛藤や問題について研究する必要性がある。そこで、本研究ではひとくくりに帰国子女が体験するする苦悩を「葛藤」「問題」として片付けるのではなく、実際にどのような体験をするのか具体的に詳しく描き出すことを目標とする。更に、当事者本人が自覚している葛藤や苦悩に留まらず、本人すらも葛藤や苦悩として認識していなかった経験を個人インタビューを通して聞き出し、その分析を通してなぜそのような葛藤が生じるのか突き止めたい。また、執筆開始当初は文化的アイデンティティに由来する葛藤に対する具体的な解消策の提示を目標の一つとして掲げていたが、研究を進めると共に帰国子女の文化的アイデンティティの多様性を改めて認識し、多様であるが故に一つの解消策を提示することは不可能に近いと考えた。そのため、本論文では解消策の提示は行わず、帰国子女本人、そして、ホスト社会(受け入れる側)が共有すべき意識や姿勢を示し、問題解決に貢献したい。

2. 先行研究と本論文の位置付け

帰国子女の文化的アイデンティティに焦点を当てた研究は今までいくつも行われてきた。その先行研究の一部では、帰国子女が帰国後に文化的アイデンティティに関する葛藤に直面するという事実について言及している。そうした葛藤や苦悩の存在を認めている一方で、具体的にどのような葛藤であるのかを帰国子女を対象としたナラティヴ・インタビューを通して分析している研究はまだ少ない（ナラティヴ・インタビューについては、第4章2節「インタビュー方法」で詳し

1 大西晶子、2001「異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー - 文化的アイデンティティ研究を中心に - 」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻、305頁

2 ホール．S著、小笠原博毅訳、1997「文化的アイデンティティとディアスポラ」、『現代思想』第26巻第4号、93頁

く説明する）。また、文化的アイデンティティに由来する葛藤が発生する原因や原理について、直接的に触れている研究は少なく、帰国子女が経験する「葛藤」「苦悩」に対する理解が一定レベルに留まってしまっている。そこで、本論文では今まで「葛藤」というたった一つの言葉に集約されてきた帰国子女の多様な葛藤の経験を詳しく描き出すと共に、この葛藤が発生する原理を明らかにし、帰国子女本人やホスト社会が共有すべき意識や姿勢示すことを通して、帰国子女のアイデンティティ研究に新しい視座をもたらすことを目標とする。

3. 本論文の構成

本論文は大きく分けて、三つの部分から構成されている。その三つのパートは、先行研究のまとめ(第1章，第2章，第3章)、インタビュー調査(第4章)、そして結論(第5章)である。

まず、先行研究のまとめ(第1章、第2章、第3章)では、帰国子女や文化的アイデンティティの研究で明らかにされている事実の紹介を通し、研究の本題に突入する前に、双方の理解を深めることをゴールとする。第1章では文化的アイデンティティの全容を明らかにする。具体的には、文化的アイデンティティの定義から始め、その形成過程や構成要素、更には自信や自尊心との関係性についてピックアップする。また、第2章では帰国子女についての理解を深める。具体的には、帰国子女の定義、アイデンティティの特異性・特徴、そして帰国子女であるがゆえに直面する諸問題に焦点を当てる。

次に、インタビュー調査の部分(第4章)は、本研究の中核ともいえるインタビューの概要について説明する。インタビューの目的を示すとともに、その対象、方法などの詳細について触れる。それに加え、実施したインタビューの内容も紹介し、帰国子女が経験する文化的アイデンティティに関係する諸問題の実態を詳しく描き出す。更に、インタビューを通してアイデンティティに関する葛藤が生じる原理を分析する。

最後に、本研究から明らかになったことを基に、帰国子女が体験する葛藤や苦悩を少しでも軽減するために、帰国子女本人やホスト社会が共有すべき意識や姿勢を示すことを目指す。

第1章　文化的アイデンティティについて

1-1.　アイデンティティとは

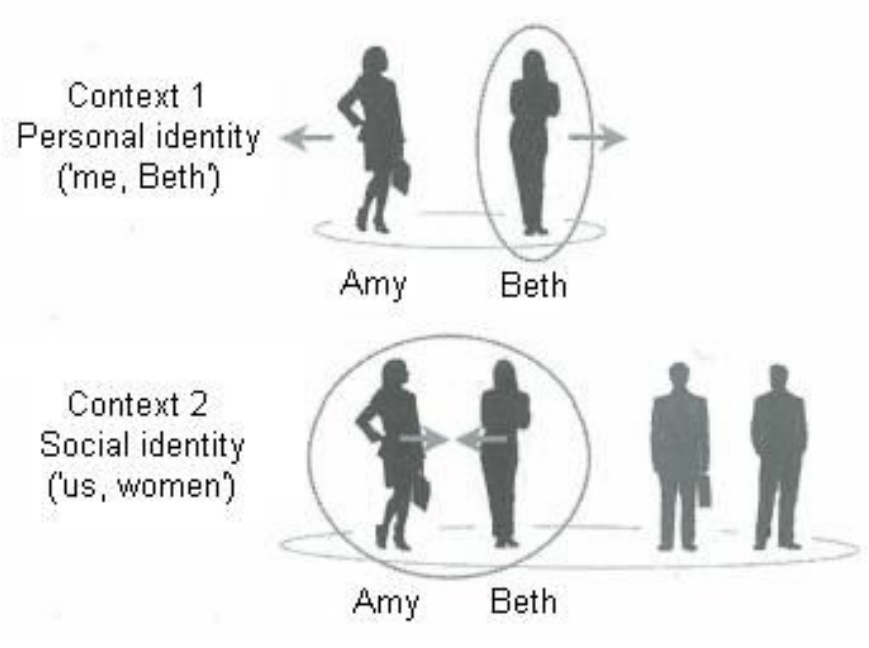
アイデンティティとは、1950年代にアメリカ合衆国の心理学者であるエリク・エリクソン(Erik Erikson)により提唱された概念である。日本語ではしばしば自己同一性、自我同一性などと訳される。アイデンティティとは、自己を他者と区別する過程において浮上する自分らしさや自分の唯一性の感覚であると説明できる。つまり、「自分が何者であるのか」という問いに対する答えこそがアイデンティティそのものであると言える。

アイデンティティはページ4の図1のように「個人的アイデンティティ(Self-Identity, Personal Identity)」と「社会的アイデンティティ(Social Identity, Collective Identity)」に分類することができると言われている[3]。このような分類について、アイデンティティの概念の生みの親であるエリクソンも言及している。エリクソンは「心理社会的アイデンティティは、主観的であると同時に客観的であり、個人的であると同時に社会的であるという…特徴を持つ」と主張し[4]、アイデンティティの主観的側面と客観的側面を認めている。個人的アイデンティティとは、自分という存在が他者とどのような点で異なるのかを確認し、自己の唯一性の感覚を主観的に捉えることにより得

3 Hogg, Michael A, 2005, *Uncertainty, Social Identity, and Ideology, in Shane R. Thye, Edward J. Lawler (ed.) Social Identification in Groups (Advances in Group Processes, Volume 22)*, Emerald Group Publishing Limited, p142

4 Erikson, E.H., 1968, *Identity, psychosocial in International Encyclopedia of the Social Sciences,* Macmillan and Free Press, p61

るものである。しかし、その一方で社会的アイデンティティとは、自身が所属する社会的集団において自分を位置付けることを通して、自身がとある集団に属しているという感覚より生まれるアイデンティティのことを指す。つまり、個人的アイデンティティとは自分のなかでの自身の位置付けであるのに対し、社会的アイデンティティとは外部社会における自身の位置付けである。社会的アイデンティティは外部環境との関わりが深く、客観的に与えられるアイデンティティであるため、個人的アイデンティティと比較すると、外部要素の影響を受けやすことが指摘できる。



【図１】個人的アイデンティティと社会的アイデンティティの比較[5]

1-2. 文化的アイデンティティの定義

第1章1節で述べてように、アイデンティティは個人的アイデンティティと社会的アイデンティティに分類することができる。本論文で焦点を当てる文化的アイデンティティは、社会的アイデンティティの一部として捉えることができると言われている[6]。

文化的アイデンティティについて、箕浦は「文化的アイデンティティとは 、国籍がどこであれ、日本人であるとかアメリカ人であるとかいうことからくる深い感情 、ライフ・スタイル 、立ち居振舞い、興味や好みや考え方を全部ひっくるめたもの」であると定義している[7]。また、鈴木は「文化的アイデンティティは 、一般的には 、自分自身がある文化に所属しているという感覚（帰属感）、 あるいは意識（帰属意識）である」と形容している[8]。こうした所属意識を通して自己定義を行う枠組みは、自己が所属する集団とは異なる他集団の存在があるからこそ成立する。そのため、文化的アイデンティティは他集団との関係の文脈に依存していると認識されている[9]。

5 Outline any two theoretical approaches to identity and explain how each has contributed to our understanding of this concept [https://www.writework.com/essay/outline-any-two-theoretical-approaches-identity-and-explai]最終検索日2019年12月30日

6 Tajfel, H. & Turner, J, 1979, *An Integrative Theory of intergroup conflict. In W. Austin & S. Wochel (Eds), The social psychology of intergroup relations*, pp33-47

7 箕浦康子、1984『子どもの異文化体験』、思索社、246頁

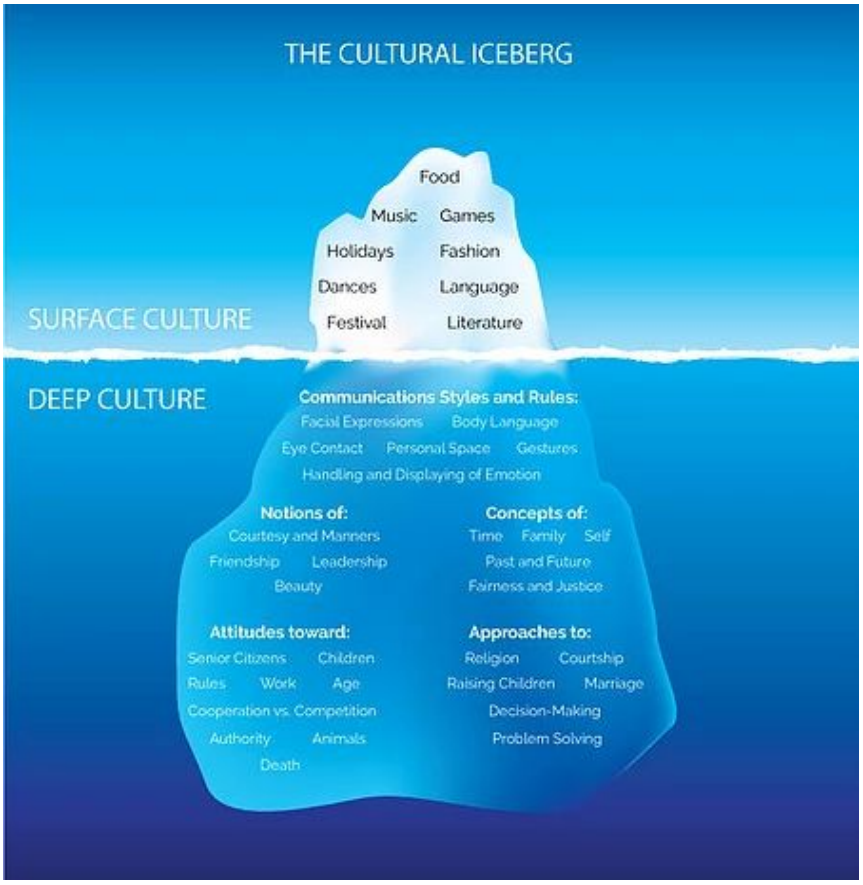
8 鈴木一代、1997「文化的アイデンティティを考える(ラウンドテーブル報告書)」、『日本性格心理学会発表論文集 』第6巻、62頁

9 大西晶子、2001「異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー:文化的アイデンティティ研究を中心に」,『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻、304頁

この文化的アイデンティティには二つの側面がある。自身が文化的な共通性を見出した文化に対して帰属意識を抱く主観的な側面と、他集団との関係のなかでの自己の位置付けという客観的側面である。また、文化的アイデンティティの大きな特徴として、双方向性が挙げられる。鈴木は「ある文化への帰属感や帰属意識は自分で思っているだけではなく、他者からも認められて、初めて安定したものとなる」と指摘し[10]、文化的アイデンティティの双方向性を認めている。

1-3. 「文化」とは

第1章2節で文化的アイデンティティを説明する際に、鈴木の定義を引用し、「自分自身がある”文化”に所属しているという感覚 （帰属感）、 あるいは意識（帰属意識）である」と定義した[11]。”文化”という言葉は親しみのある言葉である一方、抽象的な概念である。そのため、米国の文化人類学者 エドワード・T・ホール(Edward T. Hall) が提唱した「Cultural Iceberg （文化的氷山）モデル」を基に文化とは具体的にどのような要素によって構成されているのかをこの節で確認することを通して、文化的アイデンティティに対する理解をより深めていきたい。



【図2】 Cultural Iceberg Model[12]

ホールは、ページ5の図２のように氷山を用いて文化を説明し、文化は二つに分類することができると主張した[13]。一つ目は目に見える文化である。食べ物、ファッション、言語、文学などは水面上に表出している氷山の一部に例えられ、ExternalかつConciousな文化である。そして二つ目は目に見えない文化である。具体例として、価値観、信念、規範、基本的前提、思考パターンなど

10 鈴木一代、1997「文化的アイデンティティを考える(ラウンドテーブル報告書)」、『日本性格心理学会発表論文集 』第6巻、62頁

11 鈴木一代、同上

12 The Cultural Iceberg [https://martinopillitteri.wixsite.com/exportrelationships/blog/the-cultural-iceberg]最終検索日2019年12月18日

13 Hall, Edward T, 1976, *Beyond culture.* Anchor Books

が挙げられ、これらはInternalかつUnconsciousな部分である。更には、目に見えない文化は、目に見える文化を支えるものであると言われている[14]。つまり、海面下の目に見えない文化に従ってアウトプットされたものが目に見える文化であると言うことができる。

1-4. 文化的アイデンティティの形成時期とプロセス

文化的アイデンティティの形成期に関して二つの主張がこれまで成されてきた。一つ目の主張は、文化的アイデンティティは一生をかけて形成されていくという見方である。鈴木・藤原は、文化的アイデンティティ形成は青年期以降も継続し、一生続くプロセスであると主張し[15]、文化的アイデンティティが動的なものであるという見解を支持している。同じく、ホールも文化的アイデンティティは常に再形成のプロセスを辿っているという考えを示している[16]。個人のアイデンティティを見る際に、性、民族、階級など様々な側面から構成されていることが分かる。こうした一つ一つの側面に対する矛盾した固定観念やイメージなどの表象が蔓延している社会において、人は自身のアイデンティティの不確実性であったり、矛盾というものを意識するようになる。矛盾する表象が存在するからこそ、文化的アイデンティティは個人の中で常に再形成されていく。このような特徴を踏まえ、ホールは文化的アイデンティティは決して完成されない、常に変化し続けるものとして捉えている[17]。

一方で、比較的古い説ではあるが、箕浦のように、アイデンティティの形成は9歳から15歳が最も活発であり、この時期に確立されたアイデンティティはその後も変容することなく、一生変化しない[18]という見解を提示する者もいる。箕浦はこの9歳から15歳までの6年間を感受性期(Sensitive Period)と呼んでおり、この時期に文化的アイデンティティの形成は完了するという考えを示している[19]。こうした捉え方は、アイデンティティがスタティックなものでるという立場を支持していると言える。

しかし、大西の研究結果より、帰国子女が経験する異文化間移動によって文化的アイデンティティの変容が起きることが分かっている[20]。こうした点を踏まえると、文化的アイデンティティは感受性期を過ぎても変化し得るというと考えられる。また、鈴木は「文化的アイデンティティを対人関係の意味空間の体得に限定していることや、認知、行動、感情のレベルに分けて文化的アイデンティティとらえること（感情レベルでの変化が不可能であるとしていること）に疑問が残る」[21]と、箕浦の説について言及している。

とはいえ、青年期は自我が芽生え始める時期であるという点は無視してはならない。ジェーン・クローガー(Jane Kroger)は、青年期はそれまで自分を守ってくれていた両親などの重要な他者から内的に分離し始める時期であり、新しい文脈の中で自分は何者なのかという問いの答えを探し求める時期でもあると指摘している[22]。アイデンティティに対する意識が芽生える時期であるため、アイデンティティ形成が活発であると言える。

以上のような点を踏まえると、文化的アイデンティティは一度形成されたらそこで完結するスタティックなものではなく、自我が芽生え始める青年期に最も活発に形成され、そこで形成され

14 Hall, Edward T, 1976, *Beyond culture.* Anchor Books

15 鈴木一代・藤原喜悦、1993「国際児の文化的アイデンティティ形成についての事例的研究」、『東和大学紀要』第19号、123-136頁

16 ホール. S著、小笠原博毅訳、1997「文化的アイデンティティとディアスポラ」、『現代思想』第26巻第4号、90-102頁

17 ホール. S著、小笠原博毅訳、同上

18 箕浦康子、1984『子どもの異文化体験』、思索社、266-271頁

19 箕浦康子、同上

20 大西晶子、2001「異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー - 文化的アイデンティティ研究を中心に - 」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻、304-306頁

21 鈴木一代、1997「文化的アイデンティティを考える(ラウンドテーブル報告書)」、『日本性格心理学会発表論文集 』第6巻、62-63頁

22 Kroger, J., 1989, *Identity in Adolescence: The Balance between Self and Other,* Routledge

たものがその後の人生経験や外部環境と相互作用しながら変容していき、一生をかけて形成されていくものであるという捉え方が自然だと考える。

以上で述べた通り、これまでアイデンティティを静的概念として捉えるか、または動的概念として捉えるのかについて議論されてきた。しかし、アイデンティティを静的なものとして考えることによって、Phinney, Cantu & Kutzが指摘したように、異文化間移動等により引き起こされるアイデンティティの揺らぎや変容などを不適応や病的な現象として捉えられやすくなってしまう[23]。つまり、アイデンティティを静的なものとして捉えることによって、異文化間移動の経験を通して変化がもたらされた帰国子女のアイデンティティは、「非正常な状態」にあるとみなされてしまい、結果的に社会において更なる孤立をもたらしてしまう。

このような点を克服する文化的アイデンティティの捉え方として、動的な概念としての文化的アイデンティティが挙げられる。動的な概念として文化的アイデンティティを捉える際に、Hermans & Kempenが提唱した「対話的自己論」[24]が有効的であると言われている[25]。対話的自己論では、外部環境との関係性により人が示す文化的アイデンティティが異なることが示されている[26]。つまり、時と場合によりアイデンティティの在り方が変容し得る可能性を示している。対話的自己論について黒羽は、「文化的アイデンティティを自己の世界において、また自己の外側にある文化や内在化された文化との関係の中で一つの過程、動的な概念として捉える可能性を与えてくれると思われる」[27]と、文化的アイデンティティを動的な概念として捉える上で、重要な考え方であることを示唆している。

以上のような点を踏まえ、本論文ではアイデンティティを動的概念として位置付けることにする。そのような捉え方をすることによって、環境の変化と共に変わりゆく帰国子女のユニークなアイデンティティの在り方をイレギュラーなものとして研究対象から外すことなく、様々なアイデンティティの在り方を研究対象に含めることが可能になる。動的概念の考えの基、個々人のアイデンティティの多様性を尊重し、帰国子女の多種多様な文化的アイデンティティの在り方と、それに関連する葛藤や苦悩に対する理解を深めていきたい。

1-5. 文化的アイデンティティの構成要素

黒羽の研究では、「『文化的ポジション』は言語や感情傾向、志向性や行動傾向など様々な『サブ・ポジション』と結合していた」[28]と指摘し、「帰国子女にとって文化的アイデンティティは、ことば、食べ物や服の好み、積極的あるいは消極的、遅刻しやすいあるいは遅刻しにくいといった行動傾向や、これからどんなことがしたいかという将来への展望、家族や友人といった重要な他者など様々な事象で意味付けられている」[29]という結論を導いた。つまり、ことば、感情傾向、志向性や行動傾向、などのサブポジションにより文化的ポジションが構成されていくということである。

---

23 Phinney, J.S., Cantu.C.L & Kutz, D.A, 1997, *Ethnic and American Identity as Predictors of Self-Esteem Among African American, Latino, and White Adolescents, Journal of youth and Adolescence 26(2)*, pp165-185

24 Hermans, H.J.M., & Kempen, H.J.G., 1993, *The Dialogical Self: Meaning as Movement, The American Journal of Psychology 107(4),* pp23-31

25 黒羽カテリーナ、2013「帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか：２つの事例を対話的自己論の視点から検討する」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻第1号、16頁

26 Hermans, H.J.M., & Kempen, H.J.G., 同上

27 黒羽カテリーナ、同上

28 黒羽カテリーナ、2013「帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか：２つの事例を対話的自己論の視点から検討する」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻第1号、22頁

29 黒羽カテリーナ、2013「帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか：２つの事例を対話的自己論の視点から検討する」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻第1号、22頁

また、サブポジションの一つである「ことば」と近い「言語」について、丸井はアイデンティティ研究において重要な要素であると指摘するとともに、言語と民族的・文化的・社会的アイデンティティとの関係性について言及している[30]。丸井は、言語は「『民族』を規定する要素のひとつであり、『文化』を象徴するものである」[31]と説明した。この点を踏まえると、文化的アイデンティティを考える上で「言語」は欠かせない要素であることが分かる。更に丸井が言語は「『自分は何者であると思うか』『自分を何者だと見せたいか』という人間の心理と直接的に結び付いている」[32]と主張していることから、言語は一種の自己表現のツールであると言える。つまり、人は言語を通して自分が何者なのかを外部に表現し、社会集団の中で自身の位置づけを行うと説明できる。

1-6. 文化的アイデンティティと自信・自尊心の関係性

文化的アイデンティティから派生する「自分はとある集団に属している」という意識や感覚には、自信や誇りという感情が付随すると言う[33]。例えば、国籍はどこであれ、自身が日本人であるという文化的アイデンティティを持っているのであれば、その個人は日本人であるという感覚に対して誇りを持つ。しかし、第1章2節で紹介した文化的アイデンティティが持つ双方向性の特徴を踏まえると、他者から日本人であると認めてもらえない場合、自身が認識するアイデンティティと他者が認識するアイデンティティにギャップが生じ、葛藤の発生や自信の喪失に繋がり得ると考える。

更に、先行研究において、文化的アイデンティティと自尊心や精神的健康との関係性に関する分析が実行されたことがある。Phinney, Cantu & Kutzの研究では、Multigroup Ethnic Identity Measure (MEIM)を用いて、文化的アイデンティティの成熟度を測定し、自尊心や精神的健康との関連性が分析された[34]。この研究より、文化的アイデンティティが達成状態に至らない場合、達成している場合と比較すると、自我発達が未熟であったり、自尊心のレベルが低い状態で維持されるという結果が得られた[35]。

以上のような研究を踏まえると、文化的アイデンティティと自信や自尊心の感覚には深い関連性があり、一人の人間の精神的側面に大きな影響を及ぼすことが分かる。そのため、今一度ここで文化的アイデンティティは研究する価値のある、重要なトピックの一つであるということを強調したい。

第2章　帰国子女について

2-1. 帰国子女の定義

帰国子女とは、「海外勤務者等の子女で、引続き1年を超える期間海外に在留し、年度間（4月1日から翌年3月31日）に帰国した児童・生徒」と総務省統計局は定義している[36]。つまり、帰国子

---

30 丸井ふみ子、2012「アイデンティティの研究動向：異文化接触・言語との関係を中心に」、『言語・地域文化研究 (Language, area and culture studies)』第18号、198頁

31 丸井ふみ子、同上

32 丸井ふみ子、同上

33 鈴木一代、1997「文化的アイデンティティを考える(ラウンドテーブル報告書)」、『日本性格心理学会発表論文集 』第6巻、62頁

34 Phinney, J.S., Cantu.C.L & Kutz, D.A, 1997, *Ethnic and American Identity as Predictors of Self-Esteem Among African American, Latino, and White Adolescents, Journal of youth and Adolescence 26(2)*, pp165-185

35 Phinney, J.S., Cantu.C.L & Kutz, D.A, 同上

36 総務省統計局　帰国子女及び外国人児童・生徒の数［https://www.stat.go.jp/library/faq/faq22a05.html］最終検索日2019年9月20日

女は親の関係で学齢期を日本国外で過ごし、帰国後に日本の教育を受ける児童生徒と捉えることができる。

また、その数は年々増加傾向にある。外務省が発表した海外在留邦人数調査統計平成30年要約版ページ44によると、平成29年の在留邦人(学齢期)子女数(長期滞在者)は82,571人となり[37]、平成20年と比較するとその数は1.35倍(小数点第3位四捨五入)である。

異文化間接触の研究において、帰国子女と似た定義を持つ言葉として近年「サード・カルチャー・キッズ」が注目されている。サード・カルチャー・キッズとは両親が属する文化を第一文化、そして現在暮らしている文化を第二文化と定義した時に、どちらか特定の文化に属さず独自の文化(第三文化)を創造していく子どもたちを指す[38]。学齢期に異文化間接触を経験するという点では帰国子女と共通しているが、サード・カルチャー・キッズは必ずしも母国に帰国するとは限らないという点が帰国子女と異なる特徴である。

2-2. 帰国子女の文化的アイデンティティの特徴

帰国子女のように多文化環境で育ち、異文化接触を経験する者は、一国に留まって単一に近い形の文化環境で育つケースと比べ、アイデンティティ形成において外部環境からの影響を強く受けると言われている[39]。

また、日々日常的に多様な文化と接触する機会を持つ帰国子女は、「自分は何人か」「自分は何者か」「自分の文化とは」などの問いに直面する場面が一つの安定した文化の中で生まれ育つ子供より多くなると言える。

しかし、帰国子女のような異文化間で生きるバイカルチュラルな人間は、場面により帰属意識を覚える文化が変わってくるため、このような問いに直面した際にしばしば明確な答えに辿り着くことができず、自分がどの集団に属しているのかあやふやな状態で過ごすことがある。このように、帰属意識が不安定な状態が様々な葛藤や問題の根源の一つに成り得ると考える。

複数の文化に精通していることは一般的に見て、プラスに捉えることができる状態である。しかし、複数の文化に日常的に触れることは文化的アイデンティティにおける複雑性を招き兼ねない。そのため、異文化間移動を体験する帰国子女の中には、文化的アイデンティティに由来する葛藤に直面する者もいる。

2-3. 帰国子女に対する国外サポートや国内受け入れ体制 ―現状と問題点―

帰国子女は母国に帰国後、様々な問題に直面する。それぞれが抱える問題や体験する葛藤は一人一人違うが、その問題の典型例として学習面の遅れなどの学習面の問題、そして、疎外感・居づらさ、アイデンティティ・クライシスや適応の難しさなどの精神面の問題が挙げられる。

学齢期を母国以外の国で過ごす帰国子女は、その間日本の教育を受ける機会から遠ざかってしまうことを避けられない。そのような帰国子女に対して、日本政府はいわゆる日本人学校・補習授業学校・私立在外教育施設などを含む在外教育施設の設置を通して現地でのサポートを行っている。これらの施設では週末や放課後の時間に、日本国内の学校教育の教育課程の一部の教科について日本語を使って授業を行っている[40]。

---

37 外務省「海外在留邦人数調査統計(平成30年要約版)」p44［https://www.mofa.go.jp/mofa/files/000368753.pdf］最終検索日2019年9月20日

38 デビッド・C. ポロック、ルース＝ヴァン・リーケン著、嘉納もも訳、2010『サードカルチャーキッズ 多文化の間に生きる子どもたち』、スリーエーネットワーク社、34-36頁

39 丸井ふみ子、2012「アイデンティティの研究動向：異文化接触・言語との関係を中心に」、『言語・地域文化研究 (Language, area and culture studies) 』第18号、195頁

40 鹿野緑、2013「海外・帰国子女研究の文献分析-研究方法論の志向を探って-」、『南山大学国際教育センター紀要 』第13号、3頁

また、外国滞在中における学習のサポートに留まらず、日本国内では帰国子女の受け入れ体制が整えられている。具体例としてまず、国立大学附属学校帰国児童生徒教育学級の設置が挙げられる。この取り組みは帰国子女に対する教育的配慮に基づいた指導を施すことを目的にしており、昭和49年度に文部科学省により設置が開始された。文部科学省の「帰国・外国人児童生徒教育等に関する施策概要」によると平成27年の5月時点で、45校が帰国児童生徒学級を設置している。文部科学省は国立大学附属学校帰国児童生徒教育学級の設置を行うほか、帰国子女受け入れ推進地域の指定などの対策も取っている[41]。

更に、東京都教育委員会は、都立高校のなかで唯一国際学科のみを設置する東京都立国際高等学校を1989年に開校した。東京都立国際高等学校のホームページによると、外国語で授業を実施したり、帰国生枠を設けるなどの取り組みが行われている[42]。そのため、全校生徒の約3分の1を帰国子女や在京外国人など多種多様なバックグラウンドを持つ生徒が占めている[43]。こうした国際理解教育を施す高校の存在は、帰国後の選択肢の幅を広げる教育機関として捉えることができる。

加えて、帰国後の進路の選択肢の一つとして、インターナショナルスクールが挙げられる。インターナショナルスクールには法令上の規定は特になく、文部科学省の「インターナショナルスクール等の現状について」の資料では、「主に英語により授業が行われ、外国人児童生徒を対象とする教育施設」[44]と定義されているが、実際には多くの帰国子女も在籍する。同資料によると、平成17年時点で各都道府県知事から認可が下りているインターナショナルスクールの数は117校に上ると報告されている[45]。英語で授業を行うインターナショナルスクールで帰国後教育を受けることにより、日本語教育のキャッチアップや日本の学校生活への適応から免れることができる。このように、帰国後の学習面のキャッチアップや適応ストレスを取り除くことができるというプラスの特徴を持つ。しかし、その一方で、卒業後にインターナショナルスクールでの環境と日本社会のギャップに苦しむ生徒も少なくない。そのため、インターナショナルスクールを選択することは一時的な問題の解消に繋がるが、根本的な問題解消には成り得ない可能性があるという点を踏まえなければならない。

帰国子女に対する学習サポートや受け入れ体制の一例として以上のようなものが挙げられる。こうしたものが存在することは紛れもない事実である一方、このような受け入れ体制を設けていない学校も多く、日本で教育を受けてきた者と同じ条件下で学習をする帰国子女は学習面のキャッチアップに悩まされる。そのため、受け入れ体制や特別学級などがどの範囲まで機能しているか、行き届いているか、そして現在の受け入れ体制は年々増加している帰国子女の数に対応しきれているかなど、体制自体の有無に留まるのではなく、その中身や実状に目を向ける必要がある。

学習面の問題のみならず、日本社会への適応の難しさ、そして適応の際に生じる文化変容ストレスや、疎外感・居づらさ、アイデンティティ・クライシスなどの精神面の苦悩にも直面するケースもある。これらの問題の根本には、文化的アイデンティティが関わっている。本論文の第1章6節で述べたように、他者から文化的アイデンティティを認めてもらえない場合、個人の中で葛藤が生じ得る。こうした他者が捉える文化的アイデンティティと自身が捉える文化的アイデン

41 文部科学省　帰国・外国人児童生徒教育等に関する施策概要［http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001.htm］最終検索日2018年9月11日

42 東京都立国際高等学校ホームページ、学校紹介［http://www.kokusai-h.metro.tokyo.jp/school/index.html］最終検索日2018年9月11日

43 東京都立国際高等学校ホームページ、同上

44 文部科学省ホームページ、インターナショナルスクール等の現状について［http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/007.htm］最終検索日2018年9月11日

45 文部科学省ホームページ、同上

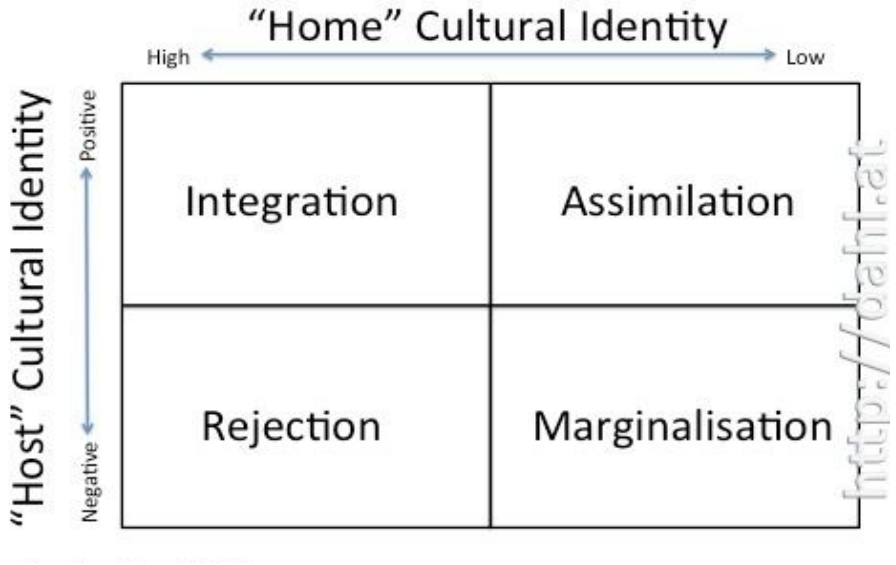
ティティの不一致は居心地の悪さやアイデンティティ・クライシスなどを引き起こす原因の一つであると考える。

先述した通り、学習面の支援や受け入れ体制はその効果や普及率を別として、支援体制そのものは少なからず存在する。その一方で、精神面のフォローや支援体制はほとんど確立されていない。その原因として、そもそも帰国子女が直面する精神的葛藤が軽視されているため、一人一人の帰国子女への対応が不可能に近く支援に限界があるため、など色々考えられる。精神的苦悩や葛藤を経験する帰国子女が存在するにもかかわらず、その支援体制が確立されていないというのが現状である。近年帰国子女の数が増加傾向にあるという点、そしてグローバル化の加速により更に帰国子女の数が増えるという点を踏まえると、文化的アイデンティティに由来する葛藤などの精神面の問題にスポットライトを当て、実態に対する理解を深めることが支援体制を確立させる過程の第一歩となる。そのため、本論文の第4章ではインタビューを通して帰国子女が経験する葛藤の実状を描きだすと同時に、葛藤が生まれる原因や原理を明らかにし、理解を深めることを目標とする。

第3章　異文化間移動における適応ストラテジー

3-1. 先行研究で提示されている適応ストラテジー・モデル

Berryの研究において、異文化間移動の結果発生する文化変容ストレスに対する適応ストラテジー[46]について論じられている。この適応ストラテジーモデルは、自文化か相手文化のどちらか一方との関係のみを捉える「一次元的なモデル」ではなく、自文化と相手文化の双方との関係性を捉える「二次元モデル」を採用している[47]。



【図3】適応ストラテジーの4類型[48]

適応ストラテジーは、自文化と相手文化との間にどのような関係を築くかにより、ページ11の図3に示されている通り四つの類型へと分類できる[49]。ページ11の図3をアメリカで学齢期を過ごした帰国子女の例を用いて具体的に説明した場合、横軸の"Home Cultural Identity(自文化)"はアメリ

46 Berry J.W, 1997, Immigration, *Acculturation and Adaptation, Applied Psychology, An International Review 46(1),* pp5-34

47 Berry J.W, 同上

48 Acculturation Theory & Marketing［http://dahl.at/wordpress/2012/03/21/acculturation-theory-marketing］最終検索日2019年1月30日

49 Berry, J. W., & Kim, U. 1988, *Acculturation and mental health. In P. R. Dasen, J. W. Berry, & N. Sartorius (Eds.), Cross-cultural research and methodology series, Vol. 10. Health and cross-cultural psychology: Toward applications,* Sage Publications, pp207-236

カの文化的アイデンティティにあたり、縦軸の”Host Cultural Identity(移住先の文化)”は日本の文化的アイデンティティを表している。

双方の文化的アイデンティティの状態をページ11図3の表に当てはめて見たときに、四つの累計へと分類できる。①両文化との関係性を維持する「統合(Integration)」、②自文化だけを重視する「孤立(Rejection)」、③相手文化だけを重視する「同化(Assimilation)」、そして④どちらの文化とも関係が弱い「周辺化(Marginalisation)」である[50]。

3-2. 四つのストラテジーの解説

以上で述べた通り、二次元モデルにおいては、「統合」「孤立」「同化」「周辺化」の四つのタイプの適応ストラテジーが存在する。

「統合」は、相手文化と自文化の双方との関係性を重視するストラテジーであり、最も負担が少なく、他の三つの適応ストラテジーと比べ、「統合」は自尊感情レベルを保ったまま適応することが可能なストラテジーであると言われている[51]。そのため、「統合」ストラテジーとは、双方の文化的アイデンティティを尊重でき、共存させることができている状態をもたらすと捉えることができる。しかし、こうした統合を実現するにあたり、個人の努力だけではどうにもならない部分もある。つまり、多様なアイデンティティの在り方が尊重される社会なしには統合を実現することは難しいと考える。

「孤立」は、自文化のみを重視し、相手文化との関わりが一切ない状態を指す。このストラテジーの典型例として、帰国後にクラスで「馴染めていない」「浮いている」などの状況が挙げられる。また、このストラテジーの特徴的な点は、孤立する人数により、精神的負担が変動するという点である。一人で自文化を尊重し、孤立している場合と自身と同じ境遇の人と複数人数で孤立している場合を例として考えてみる。前者の場合、自分のみが外部者として認識され、他の集団より孤立してしまうため精神的負担が大きいと説明できる。しかし、後者の場合、自分と同様に孤立している人が複数いるため、自分のみが外部者として扱われるのではなく、他の人も「外部者」として扱われる。このようにして自身と同じ境遇の人と小さなコミュニティを形成することにより、個人にかかる精神的負担は軽減されると考えられる。

一方「同化」は、自文化を一切無視し、相手文化のみを尊重するストラテジーである。このストラテジーでは、個人の本来の真の文化的アイデンティティを押し殺し、「偽りの自分」を作り上げて他者と同化を図るストラテジーであると捉えることができる。そのため、相手社会に馴染むことが可能だが、個人にかかるストレスは非常に大きい。

最後に、「周辺化」は自文化と相手文化の双方との関係性が弱い状態を指す。第1章6節「文化的アイデンティティと自信・自尊心の関係性」で述べたように、アイデンティティの成熟レベルと自信・自尊心の感覚の関係性を踏まえると、周辺化は自信・自尊心の感覚を低下させてしまうという点が懸念される。

第4章　インタビュー調査

4-１．インタビューの目的

本研究では個人インタビューを通して帰国子女が実際に体験する自身のアイデンティティに関する葛藤であったり、そのユニークな特徴故に引き起こされる問題などを聞き出し、細かく描き

50 Berry, J. W., & Kim, U. 1988, *Acculturation and mental health. In P. R. Dasen, J. W. Berry, & N. Sartorius (Eds.), Cross-cultural research and methodology series, Vol. 10. Health and cross-cultural psychology: Toward applications,* Sage Publications, pp207-236

51 Berry, J. W., & Kim, U. 同上

出す。また、当事者本人が自覚している葛藤や苦悩に留まらず、本人すらも葛藤や苦悩として認識していなかった経験を引き出すことを目標とする。インタビューという一種のアウトプットの作業を通して、言葉では表現することが難しい個人の心の内にある漠然としている「モヤモヤとした気持ち」を言語化することで、その問題の背後にある事情などが見えてくる可能性があると考えている。本インタビューの目的は、帰国子女として経験する葛藤の実態を把握し、理解を深めると共に、どのようにして葛藤が生じるかを分析することである。葛藤が発生する原因や原理を明らかにするにあたり、先行文献の知見を基に自分なりの仮説をたて、それらをインタビューを用いて検証していく形でその原因や原理を明らかにしていく。

4-２．インタビューの方法

日常生活において他者と自身の文化的アイデンティティについて議論する機会は少ない。そのため、自身の文化的アイデンティティに関する葛藤や苦悩、感情を言語化して客観的に捉える場面は日常において滅多にないと言える。このような傾向を踏まえ、本論文ではナラティヴ・インタビューを通して、一人一人の人生の物語を描き出す。

ナラティヴ・インタビューとは、対象者が体験したことや考えたことなど、その人自身の語りを引き出すことで、人生の物語を描き出すことだけでなく、本人すら自覚していなかった事柄をも明らかにするインタビューである[52]。また、ナラティヴ・インタビューは、事実経過を追うことを可能にするという特徴を持っているため[53]、帰国子女の文化的アイデンティティの形成プロセスや変遷を辿るのに適していると考える。もちろん最終的な目的は文化的アイデンティティに由来する葛藤や悩みを具体的に描き出し、理解を深めることである。しかし、最初から文化的アイデンティティにフォーカスを当てた質問のみをするのではなく、対象者の人生エピソードを聞き出しながら、文化的アイデンティティに関連する部分をピックアップし、その変遷を辿り、外部環境との関連などを分析していく。

ナラティヴ・インタビューを実施するにあたり、対象者からより多くのエピソードを引き出すために、イエス/ノー・クエスチョンは避け、5W1Hをベースに質問を考えていくなどの工夫が必要である。また、滞在年数、滞在国、日本語の学習レベルなどの外部要因が文化的アイデンティティに大きく作用するという点を考慮し、偏りがでないように慎重に対象者を選んでいく。

4-３．インタビュー結果の活用方法

インタビューを通して帰国子女が経験する文化的アイデンティティに由来する葛藤を詳しく描き出していく。更には、インタビュー対象者から引き出した経験談を分析して、帰国子女の文化的アイデンティティに対する理解を深めるために活用していきたい。具体的には、二つの活用方法を考えている。

一つ目は、仮説を検証するためにインタビュー結果を活用することだ。葛藤が発生する原因や原理を明らかにするために、先行文献を基に以下の二つの仮説をたてた。

Ｉ．自身が認識している文化的アイデンティティと、他者が認識している文化ティアイデンティの間に乖離が生じ、他者に自身のアイデンティティを認めてもらえていないと実感した時に葛藤は発生する。

52 中嶌洋、2017『初学者のための質的研究26の教え』、医学書院、56-58頁

53 中嶌洋、同上

Ⅱ．文化間移動に伴い、状況と場面により帰属意識の感覚を覚える文化が変わってくるため、帰国に伴う環境の変化によって自身のアイデンティティの不安定さを実感し、「どちらの文化に帰属意識を持つのか」という問に対して明確な答えを導き出せない時に葛藤は発生する。

これらの二つの仮説を念頭に置き、インタビューを通して検証する形で葛藤が生じる原因や原理を明らかにしていく。仮説はあくまでも自身が先行文献を参考にたてたものであるため、そのほかにも葛藤が生じる原因があるかもしれないという点を踏まえ、誘導するようなインタビューにならないように心がけたい。

二つ目は、第3章で紹介した適応ストラテジーモデルを用いて、インタビューを分析することだ。自文化と相手文化(≒社会)とどのような関係を築くのかを示す社会適応ストラテジーモデルを用いて分析を行うことで、ホスト社会の特徴や性質、また外部環境がアイデンティティにどのような影響を与え得るのかを知ることができると考えている。

以上のように、インタビューを活用して分析することを通して、帰国子女の文化的アイデンティティに対する理解をよる一層深めていきたい。

4-4．インタビュー結果

ここでは、実施した四つのインタビューから得られた結果のうち、文化的アイデンティティに関係がある部分のみをピックアップし、第3章で紹介した適応ストラテジーモデルを共通のフレームワークとして用いて分析していく。本節で紹介するインタビューの協力者は4名であり、4名の名前(仮名)や性別、インタビュー実施日程、滞在国や滞在期間などの情報をページ14表1に示す。

	名前(仮名)	性別	実施日	滞在国・滞在期間
インタビュー1	A	女	2018年11月1日	アメリカ合衆国・5年(小4~中2)
インタビュー2	B	男	2019年9月13日	アメリカ合衆国・10年(小3~高3)
インタビュー3	C	男	2019年12月2日	イギリス・6年(小4~中3)
インタビュー4	D	女	2019年12月26日	フィリピン・7年(3歳~小4) ベルギー・4年(中3~高3)

【表1】インタビュー協力者情報

4-4-1. インタビュー１

インタビュー１では、日本帰国後に「アメリカ人っぽい」という言葉に悩まされたAのエピソードを聞き出すことができた。

日本に帰国後、中高一貫校の女子高に編入したAは周りに「Aってアメリカ人っぽいよね」「Aって日本人っぽくないよね」など言われることが多々あった。その度に「アメリカ人っぽいとはどういうことだろう」と考えさせられたり、「それって私がみんなとは違う」と言われているのではないかと頭を悩ませた時期があったと言う。また、人と違う意見を言ったり、はっきり「NO」と言うことが好ましくないと認識されている日本のカルチャーを最初は全く理解できず、帰国

当初は日本のカルチャーに対して違和感を覚え、そうした社会に居心地の悪ささえも感じたことがあると当時を振り返った。

しかし、日本で生活をする過程で無意識のうちにAの発言や行動は「日本人っぽく」なり、周りに馴染むようになった。更には、服装に関して言えば、友達の中で浮くことを恐れ、Aは「日本人っぽい」服を選択するようになった。こうした変化を試みたのにも関わらず、それでも尚「アメリカ人っぽい」「帰国子女っぽい」「やっぱり普通の日本人とは違う」と言われることがあり、自分が受け入れられていないという感覚を覚えたこともあったと言う。A自身は純粋な日本人としての自覚を持っているのにも関わらず、周りからは日本人として捉えられていないと考えたため、Aは「自分は結局どちらの国の人間なのか」とモヤモヤした気持ちを持つこともあった。

高校入学と共に、カナダに留学をし、日本でのAは無理をして周りに合わせていたということに気が付かされ、日本での2年間は偽りの自分であったとAは自覚するようになったと言う。A曰はく、「カナダでは多様な人種が混在するため『日本人っぽい』『アメリカ人っぽい』などのレッテルを貼られることはなく、お互いの文化を尊重している。」Aは最後に、「カナダに留学してから、日本で抱えていた『モヤモヤとした気持ち』とか『居心地の悪さ』から解放された」と言った。

4-4-2.　インタビュー２

小学3年生から高校3年までの10年間をアメリカ合衆国で過ごしたBから、帰属意識の変化に関する経験談を引き出すことができた。

Bは月曜日から金曜日は現地校に通い、土曜日だけ日本語学校に通っていた。現地校では英語がなかなか喋れないということもあり、馴染めず、日本人とばかり一緒にいた。現地校では居心地の悪さを覚えた一方で、日本語学校では日本人の友達と日本語で会話することができたため、毎週通うことが楽しみであったとBは当時を振り返った。アメリカ滞在中はアメリカに帰属意識をもつことなく、日本に対する帰属意識を強く持っていたと言う。

Bは大学への入学を機に日本に帰国した。いざ大学に通い始め、日本社会での生活を初めて経験すると、気の合う友達や仲良くなりやすい友達が海外経験のある子である確率が高かったと言う。そのため、Bは大学時代は自分と同じような環境で育った帰国子女とばかり過ごした。また、帰国してから1年後の夏休みにアメリカで住んでいた街に旅行に行く際に、「アメリカに帰る」という言葉が無意識にでたことが印象的であったと言った。アメリカ在住時代はアメリカに対する帰属意識を認識していなかったが、日本に帰国して、日本で生活をするようになりアメリカに対する帰属意識が芽生え始めたのだろうか。それまで日本に対する帰属意識を持っていたが、自分の言葉のチョイスによってアメリカに対して無意識のうちに帰属意識を持っていたことにBは気が付かされた。このような変化をBは不思議に思ったと同時に、「果たして自分はどちら(アメリカか日本か)の人間なのか」ということに対して疑問を持つようになったと言う。場面場面によって帰属意識が異なってくるため、「こっち」と一つの答えは出せず、未だにハッキリしない気持ちになることもあるとBは打ち明けた。

4-4-3.　インタビュー３

Cはイギリス在住期間中、日本語で大半の授業を行う私立在外教育施設に通っていた。イギリス滞在中は日本人コミュニティで多くの時間を過ごしたCだったが、帰国後に外国人的振る舞いが無意識のうちに形成されていたことに初めて気が付いたと言う。

Cは現地での日常生活において、日本語でコミュニケーションを取る場面が多く、日本の文化に触れる機会も多かった。そのため、イギリスの文化よりは、日本の文化をより身近に感じていた

と言う。また、イギリスで街中を見渡すと白人や黒人、そしてアジア人など様々な人種の人が行き交っていることが当たり前であり、そのようなマルチエスニックな環境であったからこそ、「やはり自分は日本人だな」と感じる場面が度々あったそうだ。

6年間の海外生活を終え、高校入学を機に日本に帰国したCだが、友人とファストフード店に行った際に起きた出来事がきっかけとなり、初めて自身の中で無意識のうちに形成されていた外国人的振る舞いに気が付いたと言う。ファストフード店にてハンバーガーを食べる際、周りの包みからハンバーガーを取り出して食べていたところ、友人に「さすが外国育ちだね、食べ方も外人っぽい」と言われた経験があるそうだ。確かに周りの日本人の友人の食べ方を見ると、ハンバーガーを包んだまま食べていたので、その瞬間Cは自身と周りの「違い」を自覚し、そしてそのような振る舞いが無意識のうちに身についてしまっていたことに初めて気が付いたと言う。

Cはその出来事を、「正直、その時まで自分が外国人っぽいと思ったことは一度もなく、帰国子女の中でもどちらかと言うと日本人っぽい方だと思っていた。だからこそ、友達に外人っぽいって言われた時、結構ショックと言うか、何か複雑な気持ちになったのはすごい覚えている」と振り返った。また、「イギリスでは日本人コミュニティで多くの時間を過ごしたから、外国人的振る舞いが無意識のうちに身についていたことにもびっくりした」と加えた。最後に、Cは友人に「違い」を指摘されて以降、友人と同じように振る舞うことを次第に心がけるようになっていったと言った。

4-4-4.　インタビュー４

大学入学までの大半の期間を日本国外で過ごしたDは、周りから「喋り方が帰国子女っぽい」などと頻繁に指摘されると言う。しかし、そのような発言を受けて複雑な感情が発生したり、疎外感などを感じたことはなく、「帰国子女っぽさ」を自身のユニークネスや唯一性を確立する重要な要素の一つとして捉え、そのような特徴に対して誇りを持っている。Dは「帰国子女の自分」「日本人の自分」など何層ものアイデンティティを持ち合わせていることを自覚していて、「帰国子女っぽい」と形容される部分も自身を構成する重要な要素であると発言した。

また、Dは驚いたときなど、咄嗟に出る言葉が日本語だった時に、自身が日本人であると強く自覚すると言う。本人曰く、日本語より英語の方が得意であった時期があり、もしそのまま日本語を勉強する環境に身を置くことがなかったとしたら、日本に対する帰属意識は芽生えていなかったかもしれないと言う。

また、「ベルギーに対して帰属意識を覚えた時期はあったか」と質問したところ、ベルギーという国の特徴について言及しつつ、ベルギーに対して帰属意識を覚えた経験はないと答えた。ベルギーはアメリカ合衆国と比べ、より多様な宗教、国籍、民族の人が共存していて、それゆえ文化間のボーダーがハッキリしていないと言う。この様に、一つのハッキリと独立した文化を感じ取ることが難しいため、ベルギーに対して帰属意識を覚えることは無かったそうだ。

4-5.　インタビューの分析

Aの場合、「周りに馴染めるように日本人っぽい服を選択するようになったり、言動を日本人に合わせるようにした」などの発言から、適応ストラテジーの4類型のうち「同化」に該当することが分かる。Aは当時の経験を振り返り、「日本人」と「外国人」の線引きが明確にされ、日本人ではない者を「外部者」として扱うカルチャーが日本にはあると感じたと言う。この様なカルチャーが適応ストラテジーのシフトを引き起こした要因の一つとして考えらえる。

また、「周りに馴染めるように日本人っぽい服を選択するようになったり、言動を日本人に合わせるようにした」という発言から、Aは周りに受け入れてもらうために「日本人らしいA」を無

意識のうちにパフォーマンスするようになったと分析できる。帰国子女の文化的アイデンティティの特徴を踏まえると、この「日本人らしいA」は異文化間移動の経験を通してAの中で形成されていった多重的なアイデンティティの一部として備わっていたものとして捉えることが自然である。つまりは、異文化間移動を経験したAは多重的なアイデンティティを持っていて、場面に応じて適切な「自分」を選択し、一種のパフォーマンスを通して「自分が何者なのか」ということを外部に提示すると考えられる。しかし、今回のエピソードのように、自身が外部に向けて提示するアイデンティティと他者が認知するアイデンティティの間にミスマッチが生じた際に「葛藤・苦悩・モヤモヤとした感情」が引き起こされると考えられる。

Bの場合、どの適応ストラテジーに分類されるかを判断することが難しいと感じた。インタビューにあった「自分と同じバックグラウンドを持つ帰国子女の友達と一緒にいることが自然と多かった」という発言から、自文化のみを重視し相手文化との関わりが一切ない適応ストラテジー「孤立」に該当するように一見思える。しかし、インタビューでは「自分は自分だし、友達は友達」と言っていた場面もあった。その発言について詳しく聞いていったところ、「みんなそれぞれが持つバックグラウンド・経験・文化を尊重している」という意味であると言っていた。そのため、適応ストラテジー「孤立」の特徴の一つである「自文化のみを重視し」という点に該当しない。これらの点を踏まえると、自文化と相手文化の双方を尊重する「統合」に分類することが相応しいと考える。

また、言葉のチョイスから帰国前後の帰属意識の変化が確認できる。このようにして、文化的アイデンティティが固定的ではなく変化し得るがゆえに「自分の文化的アイデンティティとは」という問いに対するクリアな解答を導けず、Bが経験するような「モヤモヤ・ハッキリしない」気持ちが発生するということが確認できる。

Cの場合、適応ストラテジーの変化が見られる。友人に外国人的振る舞いを指摘されるまでは、意識的に相手文化に合わせるというような行動は見られず、自文化とも適切な距離を保っている。そのため、最も近い特徴を持つ適応ストラテジーは「統合」だと言える。しかし、Cは「友達に『外国育ちはやっぱり違うね』と言われてから、周りに次第に合わせるようになった」と言い、自身の行動や発言を周りに合わせるようになっていったと言う。この様なエピソードから、外国人的振る舞いを指摘されたことをきっかけに、適応ストラテジーは「同化」へと変化し、適応ストラテジーのシフトが起きたと分析できる。加えて、周りに合わせるようになった理由を聞くと、「友達は悪意があっての発言じゃなかったかもしれないけど、自分だけ『外国人っぽい』というラベルを貼られて、少し距離・疎外感を感じた。同じじゃないと仲間じゃない的な雰囲気を感じた」からだと答えた。このような発言から、「外部者」との間にはっきりとした線引きが成されていることが読み取れる。

また、友人に振る舞いの違いを指摘された際、「結構ショックと言うか、何か複雑な気持ちになった」という発言が文化的アイデンティティに由来する葛藤と深く関係があった。この発言について当時の思いや感じたことを更に詳しく聞き出した結果、C自身が自分は日本人だという意識が強くあったにも関わらず、「外国人的」であると指摘されたことによって、自身がリジェクトされている気持ちになってしまったと言う。つまり、自身が認知している文化的アイデンティティが他者によって受け入れて貰えなかった時に、葛藤などの複雑な感情が発生すると分析できる。

Dの場合、自文化と相手文化双方と適切な関係を保っている点から、適応ストラテジーの「統合」に該当すると分析する。インタビューにおいて、Dは自身の「帰国子女っぽさ」を自分を自分たらしめる要素として認識し、そのような一面を誇りに思っていると発言した。更に、この発言を深く掘り下げていったところ、日本人っぽい自分も、帰国子女っぽい自分も、どちらも自身の

アイデンティティの一部であると自覚していた。つまりは、異文化間移動の経験を通して、多重的なアイデンティティが形成されていき、今では自身を構成する何層ものアイデンティティに誇りを持ち、自身の唯一性を確立するユニークな要素であるとDは認識している。更には、周りに「帰国子女っぽい」と指摘されることがあっても、受け取り方は人それぞれであるという考えがDにはあるため、そのような発言も素直に受け入れられると言う。このように、自文化と相手文化双方を尊重し、適切な距離を保っている点から、適応ストラテジーの「統合」に該当すると判断できる。

また、Dの場合、言語の習熟度が文化的アイデンティティに大きな影響を及ぼしていたことが分かる。ナラティヴ・インタビューを通して、ライフヒストリーを振り返る過程で、Dは言語という観点から文化的アイデンティティについて言及した。Dは3歳からフィリピンで暮らしていたため、日本語があまり話せず英語の方がスラスラと喋れる時期があったが、フィリピンから帰国したことをきっかけに、日本語の勉強を本格的にするようになったと言う。Dは、「もしその時しっかり日本語を勉強する機会がなかったら、もしかしたら今の自分の帰属意識は違ったかもしれない」と改めて当時のことを自身の帰属意識と関連付けながら振り返った。このような発言を踏まえると、言語の習熟度が文化的アイデンティティに大きな影響を与え得ることが指摘できる。

4-6.　インタビュー全体を踏まえての考察

本論文で実施した4件のインタビューを通して、帰国子女の文化的アイデンティティについて多種多様な経験談を聞き出すことができた。しかし、インタビュー実施数が4件と少なく、一般化した結論を導くには調査が不十分である。よって、この節ではインタビュー調査全体を通して得た新たな発見を「findings」として扱い、次の四つのfindingsを提示する。

一つ目は、自身が外部に対して提示する文化的アイデンティティと他者が認知する文化的アイデンティティのミスマッチが、葛藤や複雑な気持ちを引き起こす要因の一つに成り得るということが確認できた。インタビュー１では、日本人としての自分を演じても尚、「帰国子女っぽい」「やっぱり普通の日本人とは違う」などと言われたことがきっかけとなり、「自分は結局どちらの国の人間なのか」とモヤモヤとした気持ちが芽生えたという証言があった。更に、インタビュー３においては、日本に対して帰属意識を持っていたにも関わらず、外国人的振る舞いを友人に指摘されたことによって、自身のアイデンティティを否定された気持ちになってしまい、複雑な感情が芽生えたという発言を得ることができた。以上の二つのエピソードを踏まえると、先行研究を基にたてた仮説「自身が認識している文化的アイデンティティと、他者が認識している文化ティアイデンティの間に乖離が生じ、他者に自身のアイデンティティを認めてもらえていないと実感した時に葛藤は発生する」が間違いではないことが分かる。しかし、インタビュー４のように、自身が認識する文化的アイデンティティと他者が認知する文化的アイデンティティの間にミスマッチが生じても、葛藤や複雑な感情に繋がらないケースも見られた。インタビュー４では、「帰国子女っぽい」と形容される一面を自身のユニークネスや唯一性を確立する大切な要素の一つとして捉えているという点が特徴的だった。このように、異文化間移動という経験を通して培われたユニークなアイデンティティをどのように受け入れるか、そしてどのように捉えるかによって結果が左右してくると推測する。

二つ目は、文化的アイデンティティが固定的ではなく、文化間移動などの経験を通して変化し得るという特徴を持ち、不安定であることが影響し、文化的アイデンティティに由来する葛藤が発生する場合があることを確認することができた。インタビュー２では、帰国後にアメリカに旅行する際に「アメリカに帰る」という言葉を無意識にチョイスしたことによって、自身のアイデンティティの不安定性を認識し、「果たして自分はどちら(アメリカか日本か)の人間なのか」と疑

問に思うようになり、モヤモヤとした気持ちが発生したという発言があった。よって、インタビュー２より、先行文献を基にたてた仮説「文化間移動に伴い、状況と場面により帰属意識の感覚を覚える文化が変わってくるため、帰国に伴う環境の変化によって自身のアイデンティティの不安定さを実感し、『どちらの文化に帰属意識を持つのか』という問に対して明確な答えを導き出せない時に葛藤は発生する」が間違いではないことを確認することができた。

三つ目は、言語習熟度が文化的アイデンティティに影響を与える可能性があることを確認できた。インタビュー４では、「咄嗟に出る言葉が日本語だった時、自分日本人だなと感じる」「日本語を勉強する機会がなかったら、もしかしたら今の自分の帰属意識は違ったかもしれない」など、言語習熟度と文化的アイデンティティの関係性を指摘する発言があった。また、インタビュー３では、英語より日本語の方が得意であり、アメリカ滞在期間中は日本に対して帰属意識を持っていたという発言があった。以上の経験談から、より習熟度が高い言語に対して文化的アイデンティティを覚える傾向にある可能性が指摘できる。

四つ目は、「日本人」と「外国人」「外部の人間」の線引きを明確にするカルチャーが日本社会全般にあるとまでも言えずとも、少なくともインタビュー協力者の周りには存在していたということである。実際にインタビュー1、3、4では共通して、「帰国子女っぽい」「外国人っぽい」「さすが海外育ちは違う」など、日本人または日本で育った人との違いを察知すると、その違いを指摘する発言が目立った。このような特徴が、インタビュー１と３で紹介した適応ストラテジー「同化」へのシフトを引き起こす要因の一つとして考えられる。ホスト社会の性質が、適応ストラテジーの実現可能性に多きな影響を及ぼすことを踏まえると、最も理想とされている適応ストラテジー「統合」を実現するためには帰国子女本人の努力だけでなく、ホスト社会のカルチャーなどの外部環境も重要なプレーヤーであるととう点が指摘できる。

第5章　おわりに

帰国子女の文化的アイデンティティやそれに由来する葛藤に焦点を当てた先行研究はあるが、文化間移動を通してどのような経験をするのかなど、実体験を具体的に描き出している研究は少ない。今後、帰国子女の数が増えること、そして帰国子女の精神面でのフォローアップ体制が十分に確立されていないことを踏まえ、本論文では今まで「葛藤」と一言に凝縮されてきたエピソードをインタビュー調査を通して詳しく描き出し、文化的アイデンティティに由来する葛藤が発生する原理の追求、そして葛藤に直面した際の具体的な解消策の模索を行った。

実施した4件のインタビューより得た多種多様な経験談を基に、第4章6節で示した四つのfindingsを導いた。一つ目は、文化的アイデンティティに由来する葛藤が発生する原因の一つとして「自身が外部に提示する文化的アイデンティティと、他者が認知する文化的アイデンティティのミスマッチ」が挙げられる。具体的には、自身が提示する文化的アイデンティティと他者が認知するアイデンティティが一致しなかった時、自身が受け入れられていないという感情や否定されているという感情が発生し、葛藤や複雑な感情へと繋がるということである。インタビュー調査から得た結果のみならず、鈴木の研究でも、「ある文化への帰属感や帰属意識は自分で思っているだけではなく、他者からも認められて、初めて安定したものとなる」[54]ことが指摘されていることから、文化的アイデンティティが双方向性という特徴を持つことが確認できる。

二つ目は、「異文化間移動の経験を通して培われた文化的アイデンティティの、多重的かつ動的であるという特徴が影響し、葛藤が生じる」ということである。丸井の研究では、異文化接触を経験する者は、一国に留まって単一に近い形の文化環境で育つケースと比べ、アイデンティ

54 鈴木一代、1997「文化的アイデンティティを考える(ラウンドテーブル報告書)」、『日本性格心理学会発表論文集 』第6巻、62頁

ティ形成において外部環境からの影響を強く受けることを指摘している[55]。このような帰国子女の文化的アイデンティティの特徴を踏まえると、異文化間移動という特殊な経験によって生じる外部環境の変化が、アイデンティティを形成する過程において大きな影響を与えていることが分かる。

三つ目は、言語習熟度が文化的アイデンティティに影響を与える可能性があるということである。先行研究においても、丸井の研究でアイデンティティ研究における「言語」というキーワードの重要性が指摘されている[56]。本論文では、言語の中でも特に「言語習熟度」が文化的アイデンティティに関係している可能性があることを発見した。具体的には、言語習熟度がより高い言語を使用する文化に対して文化的アイデンティティを覚えるということである。本論文ではインタビュー実施数が少なく、十分なエビデンスが得られなかったため、一つのファクトとして扱うことは避けるが、今後、言語習熟度と帰国子女の文化的アイデンティティの関係性を明らかにし、言語教育という観点からアプローチしていきたい。

四つ目は、「日本人」と「外国人」「外部の人間」の線引きを明確にするカルチャーが日本社会全般にあるとまでも言えずとも、少なくともインタビュー協力者の周りではあったということが確認できた。インタビューで紹介したように、服装や行動など目に見える表面的な「違い」によってラベルを貼るカルチャーは、適応ストラテジー「同化」へのシフトを引こす要因になり兼ねないため、アイデンティティ研究においてホスト社会のカルチャーの在り方なども重要なプレイヤーであることをここで今一度指摘する。

本論文では当初、文化的アイデンティティに由来する葛藤に対する具体的な解消策の提示を一つの目標として掲げていた。しかし、研究を進めると共に、文化的アイデンティティの多様性を改めて認識し、万人に通用する一つの解消策を提示することは限りなく不可能に近いと考えた。また、一つの解消策を提示することは、帰国子女のアイデンティティの多様性を無視することに等しい。そのため、本論文では一つの具体的な解消策の提示は行わず、帰国子女本人、そして、ホスト社会(受け入れる側)が共有すべき意識や姿勢を示す。

まずは、「多様性」というキーワードを日常的に意識し、フレキシブルなマインドを心がけることが大切だ。帰国子女本人の場合、自身の多重的なアイデンティティや不安定なアイデンティティをイレギュラーなものではなく、一つの「多様性」として捉え、そのようなユニークなアイデンティティを自身の唯一性を構築する要素の一つとして受け入れることで、アイデンティティとの向き合い方に変化が表れると推測する。一方で、受け入れる側としては、自文化と異なる文化を持つ人に接触した際、文化間の「違い」に焦点を当て、「自文化」「自文化以外」とラベル貼りを行うのではなく、「自文化以外」を多様性として受け入れる姿勢を培い、お互いの文化を尊重する姿勢が大切だと考える。

以上の多様性を受け入れる姿勢やフレキシブルなマインドに加え、「もう一段踏み込んだ相互理解」の必要性も指摘する。相手のファッションや言動などの目に見える文化で物事を判断するのではなく、それらを支える目に見えない文化、つまりは文化的バックグラウンドまでをも理解しようとする姿勢が大切だ。ホールが「Cultural Iceberg （文化的氷山）モデル」を用いて、目に見える文化は全体の1割に過ぎず、目に見えない文化が9割をも占めている[57]と提唱したことを踏まえると、相手の文化的バックグラウンドを理解しようとせずに、表面的な目に見える文化の違いのみで相手との関係性を決めることは危険である。

---

55 丸井ふみ子、2012「アイデンティティの研究動向：異文化接触・言語との関係を中心に」、『言語・地域文化研究 (Language, area and culture studies)』第18号、195-196頁

56 丸井ふみ子、2012「アイデンティティの研究動向：異文化接触・言語との関係を中心に」、『言語・地域文化研究 (Language, area and culture studies)』第18号、198頁

57 Hall, Edward T, 1976, *Beyond culture*. Anchor Books

今後、更なるグローバル化によって帰国子女のみならず、多くの外国人が日本で生活をするようになると予想する。そうした変化が社会で起きる時代であるからこそ、相手の文化的バックグランドまでを理解しようと互いに歩み寄り、互いの文化を尊重する姿勢がまず何より大切になってくるということを最後に強調したい。

＜引用文献・参考文献＞

・大西晶子、2001「異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー - 文化的アイデンティティ研究を中心に - 」、『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41巻、304-306頁
・外務省ホームページ、「海外在留邦人数調査統計 平成30年要約版」(https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000368753.pdf、2018年7月29日アクセス)
・鹿野緑、2013「海外・帰国子女研究の文献分析-研究方法論の志向を探って-」、『南山大学国際教育センター紀要 』第13号、1-16頁
・黒羽カテリーナ、2013「帰国子女は文化的アイデンティティをどう体験しているのか：２つの事例を対話的自己論の視点から検討する」、『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第7巻第1号、15-22頁
・鈴木一代、1997「文化的アイデンティティを考える(ラウンドテーブル報告書)」、『日本性格心理学会発表論文集 』第6巻、62-63頁
・鈴木一代・藤原喜悦、1993「国際児の文化的アイデンティティ形成についての事例的研究」、『東和大学紀要』第19号、123-136頁
・総務省統計局ホームページ「帰国子女及び外国人児童・生徒の数」(https://www.stat.go.jp/library/faq/faq22/faq22a05.html、2019年9月20日最終アクセス)
・デビッド・C．ポロック、ルース＝ヴァン・リーケン著、嘉納もも訳、2010『サードカルチャーキッズ 多文化の間に生きる子どもたち』、スリーエーネットワーク社、34-36頁
・東京都立国際高等学校ホームページ、「学校紹介」(http://www.kokusai-h.metro.tokyo.jp/school/index.html、2018年9月11日アクセス)
・中嶌洋、2017『初学者のための質的研究26の教え』、医学書院、56-59頁
・ホール．S著、小笠原博毅訳、1997「文化的アイデンティティとディアスポラ」、『現代思想』第26巻第4号、90-102頁
・丸井ふみ子、2012「アイデンティティの研究動向：異文化接触・言語との関係を中心に」、『言語・地域文化研究 (Language, area and culture studies) 』第18号、193-209頁
・箕浦康子、1984『子どもの異文化体験』、思索社、246,266-271頁
・箕浦康子、1994「異文化で育つ子供たちの文化的アイデンティティ」、『教育学研究 』第61巻第3号、213-221頁
・文部科学省ホームページ、「帰国・外国人児童生徒教育等に関する施策概要」(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/clarinet/003/001.htm、2018年9月11日アクセス)
・文部科学省ホームページ、「インターナショナルスクール等の現状について」(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/06042105/007.htm、2018年9月11日アクセス)
・Berry J.W, 1997, *Immigration, Acculturation and Adaptation, Applied Psychology, An International Review 46(1)*, pp5-34,62-68
・Berry, J. W., & Kim, U. 1988, *Acculturation and mental health. In P. R. Dasen, J. W. Berry, & N. Sartorius (Eds.), Cross-cultural research and methodology series, Vol. 10. Health and cross-cultural psychology: Toward applications,* Sage Publications, pp207-236
・Erikson, E.H., 1968, *Identity, psychosocial in International Encyclopedia of the Social Sciences,* Macmillan and Free Press, p61
・Hall, Edward T, 1976, *Beyond culture.* Anchor Books
・Hermans, H.J.M., & Kempen, H.J.G., 1993, *The Dialogical Self: Meaning as Movement, The American Journal of Psychology* 107(4), pp23-31

・Kroger, J., 1989, *Identity in Adolescence: The Balance between Self and Other,* Routledge
・Michael A. Hogg, 2005, *Uncertainty, Social Identity, and Ideology, in Shane R. Thye, Edward J. Lawler (ed.) Social Identification in Groups (Advances in Group Processes, Volume 22),* Emerald Group Publishing Limited, pp203-229
・Phinney, J.S., Cantu.C.L & Kutz, D.A, 1997, *Ethnic and American Identity as Predictors of Self-Esteem Among African American, Latino, and White Adolescents,* Journal of youth and Adolescence 26(2), pp165-185
・Tajfel, H. & Turner, J, 1979, *An Integrative Theory of intergroup conflict.* In W. Austin & S. Wochel (Eds), The social psychology of intergroup relations, pp33-47